



説教要旨「熱心で、滑稽な祈り」

使徒言行録 12章 1～17節

ペトロがヘロデ王に捕らえられました。取り調べて、罪のあるなしを判断するためではありません。ヘロデ王はただユダヤ人たちに取り入れるために、キリスト者を迫害するのです。教会はこれまでも、ユダヤ教の指導者たちや民衆からの迫害を受けてきましたが、いよいよ国家権力による迫害が始まったのです。この危機に教会がしたことはただ一つ、祈ることでした。圧倒的な暴力の前で、もはやどうすることもできず、ただ神様に祈ることしか出来なかったのです。しかし神様はその祈りを聞き届けました。いよいよ明日にはペトロが人々の前に引き出されて処刑されるというその夜、主の天使がペトロを牢獄から導き出したのです。教会の熱心な祈りが聞き届けられ、その願いが叶えられた出来事だと言えます。

祈り願ったことがその通りに現実となりました。ところが彼らはその現実をなかなか信じることができませんでした。彼らは熱心にペトロの無事を祈り願いつつ、その実、その祈りが本当に聞き届けられるとは思っていなかったのです。

「祈ったところで現実がどうなるものでもない」そんな諦めにも似た思いを持ちながら、わたしたちは祈ってはいないでしょうか。祈るよりも自分で何とかしなければ、という思いので、祈りつつもその祈りが本当に適えられると信じていないのです。しかし、そのようにうわべだけの祈りであっても、神様は教会の祈りを聞き届けられ、ペトロを救いだされたのです。神様への100%の信頼に基づいた祈りでないにも関わらず、神様はこの情けの無いわたしたちの祈りを聞いて下さるのです。神様は、祈ることにおいても不信仰を露呈してしまうようなわたしたちを、それでもイエス・キリストの十字架の死によって赦して下さり、恵みの内に置いて下さっています。その恵みに支えられて、わたしたちは祈ることができる者とされるのです。

わたしたちの祈りは、私たちの置かれた状況がまさに絶望であり、何の希望も見出せないようになって、なおそこで、イエス・キリストによる救いを見つめることなのです。

(2022・7・10 説教者：稲垣真実)